

## 第4回南陽市小中学校適正配置等検討委員会議録（概要）

日時：令和6年8月29日（木）

午後7時～9時

場所：南陽市役所4階 大会議室

○欠席者 佐藤（寛）委員

○委員長挨拶概要

- ・ 南陽市小中学校の更なる発展、子どもたちの健やかな成長を図る意味で、本委員会は最も核になる会議。委員の積極的な発言に期待。
- ・ 南陽市は「教育は心を育てる」として、健やかな心と体をつくり、その上に認知領域としての学力向上を目指してやってきた。南陽市の適正規模・適正配置を考えるときには「頭でっかち」な人材ではなく、体も丈夫、心も健康、このような人材育成を図っていかねばならない。そのための教育環境をどう作るかが大事。
- ・ 今回は小学校に絞った議論を行う。委員の意見を聞きながらまとめていきたい。

○説明及び協議 議長：猪野委員長

（1）前回会議のまとめ～南陽市中学校の適正規模について～（説明：学校教育課長）

- ・ 前回会議の結果、市内中学校の適正規模として、「最低でも1学年3学級以上、全体で9学級以上を目指す。できれば、国で定める基準の『12学級以上』に近づけていくべき」との意見でまとまった。
- ・ さらに、これを踏まえ、南陽市立中学校は将来的に「1校」を視野に入れた検討が必要ではないかとの意見が多数を占めた。

（2）南陽市立小学校の適正規模について（説明：学校教育課長）

①これまでの経過

- ・ 平成19年度以降に中学校の統合に着手して以降、小学校については「各校の特色」や「小規模校のメリット」を最大限に生かし、指導の充実を図ってきた。
- ・ 統合については「住民発意」を基本としつつ、児童数の減少が著しい吉野・中川地区では「教育を語る会」を開催し、保護者や地域の皆様と「子どもたちにとって望ましい学習環境とはどういうものか」ということを中心に、教育環境の整備について意見交換を行い、理解を得たうえで進めてきた。
- ・ 技術革新が急速に進み、社会構造が大きく変化し続ける現在、これからの学校づくりは「探究的な学び」など、新しいスタイルを取り入れながら、「児童生徒が自ら考え行動し、社会に貢献できる人材へと成長できる」ようにするための環境整備が必要である。
- ・ 「地域総合型教育」の考え方のもと、「地域」を柔軟に捉え、学ぶフィールドが広がったり、活用できる教育力や資源が増えたりするという効果を生かしたい。
- ・ 加えて、探究的・協働的な学びを進めるためには、「一定の集団規模の確保」が必要と考えている。

→ その結果、荻小は宮内小と、中川小は赤湯小と統合し、新しい環境での学びをスタート。

## ②小学校の適正規模にかかる将来的な見通し

- ・ R6現在、「標準的な規模（12～18学級）」の小学校は市内に3校。一方で「複式学級」がある学校は2校、クラス替えが出来ない「単学級」の学校が1校。
- ・ R12となると、児童数の減少により「標準的な規模」が2校、「複式学級」がある学校が2校、クラス替えが出来ない学年もある学校が1校となる見通し。  
→ 今後さらなる児童数の減少が見込まれるため、南陽市立小学校の適正な規模を検討する必要がある。

(出された主な質問・意見)

(質問)

- Q. 小学校の適正規模にかかる議論にあたり、これまでのように「小規模校のメリット」等を踏まえて行うのか、それともまっさらな状態で議論してよいのか。
- A. 子どもたちを取り巻く環境はこれまでもこれからも大きく変わり続けることが想定され、今後は、知識の量を増やすよりも、知識と知識を繋げ、いかに新たな価値を創造することができるか、が求められる。その点を踏まえれば、仲間と協働して創り出す力、議論を通して解決する力等が必要であり、発達段階に応じて、多様な経験を積み重ねていくことのできる環境が非常に大事になることから、「一定の集団規模の確保」が必要と考えている。  
(学校教育課長)

- Q. 過去に行われた「教育を語る会」において、ごく少人数の学校の方が望ましい学習環境である、として「統合は控えてほしい」という意見は存在したか。
- A. 大きい環境で学ぶとなった時に、親も子もその環境に馴染めるか不安だという声も一部あったが、全体的に「大人数の中で、多様な意見に触れながら学ぶ機会を設ける」ことに肯定的であったと理解している。中には「もう少し早く統合してほしい。」という意見もあった。(学校教育課長)

- Q. 市内各学校の校舎は古いものも多いが、「建替え」の具体的な予定は。
- A. 具体的な「建替え」の予定はない。現在は「長寿命化計画」(令和2年)により、「現在の校舎を維持する」としている。適正規模・適正配置の議論を踏まえ、ハードの話はその後になるものと認識している。(管理課長)

- Q. 小学校も中学校と同様、統合の方向へ向かうのかと思うが、中学校と小学校の教育環境のあり方の違いや、こうあるべきという「理想」の部分を教えてほしい。
- A1. 発達段階に応じて異なる対応が必要という部分は大きいと考えている。また「小と中」「幼保と小」の接続にも十分配慮が必要である。(学校教育課長)
- A2. 全ての人を学校に引き留めるという世の中ではなくなくなってきており「学びたい人が学べる」環境の整備は重要となっている。また「お互いに話し合い、折り合いをつける」経験ができる環境が、小学校においても必要になっていると考えている。(板垣委員)

- Q. 小学校で学童に通う児童はどのくらいいるか。
- A. 正確な数字は把握していないが、赤湯小は今年度新たに「第三学童」が設置された。ニーズは増えているという認識である。(学校教育課長)

(意見)

- ・ 子どもがずっと複式学級で学んできた経験から言えば、子どもたちにとって複式学級は、とても良いと思う。先生からの手厚い指導があり、勉強の身につけ方等は大きい学校とはやはり違う。ただ、同じ複式学級であったとしても、1学年2人（のような極少数）となると、多様な意見を得るといふ点からは厳しい。そのような状況が発生した（想定された）段階で、統合へ向けた検討を進めてはどうか。
- ・ ハード面を見ると、校舎がかなり古くなっているものが多い。建て替えの方向性も考えながら、統合や別の用途での活用など、地元から希望があるかも踏まえて考える必要があるのではないか。
- ・ これからの児童数減少を見越して統合を考えた場合、宮内小は漆山小と統合したとしても標準規模を維持できない。今後宮内小をどうしていくかは課題となる。例えば、小規模が想定された学校では、学校（校舎）の中に、地域の人達が何か活動をするための仕組みをつくり、子ども達が常に地域の方々と関わりが持てるような環境を整えることができれば面白い。  
また、宮内小が将来的に児童数が減少するのであれば、結局また統合の検討が必要になる。それならば、初めからどこかと一緒になって、市内の小学校は「2校」という選択肢もあるのではないか。ただし、統合後の小学校をどこにどういうふうにするかは、大きな課題。
- ・ いつまでも町村合併（昭和42年）前の2町1村の枠組にこだわる段階ではもはやない。小学校のあり方については、現時点で3校体制や2校体制といった考えがあると思うが、（現在の中学校区である赤湯・宮内・沖郷の）3校となれば、旧枠組の中では宮内地区の児童数の減少が著しい。しかし、宮内小と漆山小に加え、梨郷小をそこに併せると、3校体制は維持できるのではないか。具体的なシミュレーションが必要。
- ・ これからの学校づくりはあくまで「子どもを主語に」ということをブレずに考えていかなければならない。その為には「多様な意見・考えに触れる機会」「議論したり意見交換する機会」といった環境を確保していく必要がある。人口がこれから急に「V字回復」ということは恐らく「ない」という中で議論を進めていく必要がある。  
一方で教員の確保も課題。複式学級をしっかりと運営できる教員はどのくらい存在するのか。産休育休代替の教員の確保、また子どもたちが「先生方を選べる」環境も大事にしていかなければならない。
- ・ 統合後の小学校を「1校」にすることはできるのか。今議論されているのは「3校にする」「2校にする」ということだが、3校や2校にしても、いずれもっと減っていき1校にせざるを得なくなるのではないか。  
→ 1校となれば、校名や立地などに関して、本委員会の答申内容についても配慮する必要があるだろう。保護者としては、地域外の学校に「越境入学」させているような感覚にならないだろうか。（猪野委員長）  
→ 統合するとなった場合は、例えば「南陽小学校」として、1校にした方がまとまりやすいとも考えられる。（委員）

- ・ 統合は賛成で、大きい学校は1校でも2校でも良いと思うが、一方で、不登校や教室に入れない子も増えている。そういったこの受け皿となる学校の存在も必要なのではないか。なかなか大集団に馴染めないお子さんやつらい思いをしているお子さんのための「何か」が欲しい。
- ・ 現在急激に減り続けている子どもの数を考えると、小学校といえどゆくゆくは1校にせざるを得ないと考えている。その一方で、現在もなお、市民の中には昔の旧町村単位の地域性を大事にしている部分も否定できないので、最終的に「1校」を目指すにしても、赤湯・沖郷・宮内の3つの枠組みを大事に、出来るだけ（小規模になったとしても）継続させていくのも良いのではないか。
- ・ 適正規模を考えると、不登校等の児童生徒にとっての「適正規模」とはどういう規模なのか。あまり大きくない規模ということもあるのでは、と感じた。
- ・ 今後統合を進めるにあたって、地域によっては、統合後の学校名が以前のものをそのまま使われることに反発が出る場合もあると思われる。ある地区の人が「吸収合併された」というような意識に立たないで済むような提案を、委員会として行いたいものだ。
  - 統合後の校名や校歌は変えていく方が良いと思う。総合的に考えれば、将来に禍根を残す可能性のあるものもあるだろう。全く新しい形で進めていくということは解決策の一つではないか。（委員）
  - 市内の学校がこれから少なくなっていく時に、地域の人達の思いを大事にするとして、校歌・校章等、学校に関わる特別なものは新しいものにしていくのが良いのではないか。（委員）
  - 統合にあたっては、やはり「校歌を変える」「校名を変える」という共通認識を市民の皆さんに持っていただく必要がある。（猪野委員長）
- ・ 個人的には、今の学校体制をギリギリまで維持していただきたい。しかしながら、委員会の議論の流れで行くと最終的に1校への統合へ向かうのかと思う。現在、中学校は3校であるので、小学校を統合するにあたってはそこに合わせた3校という形が、地域の理解も早いのではないか。
  - また、統合後の小学校となった場合、子どもたちはどうやって地域と関わっていくのかが想像しにくい。
  - 例えば、統合後の宮内小で荻地区へワラビ採りに出かける等、これまで宮内小にとっては「学びのフィールド」ではなかった吉野地区が学びの対象として広がっている。それらの効果を教育活動にいかす必要があると捉えている。（学校教育課長）
  - 統合後の学校で、様々な地区の人材を活用していくことが出来れば、地域の人の意識も学校から離れないのでは。（委員）
- ・ 小学校は、ズバリ3校で良いのではないか。そして、いずれ1校になっていくとも考える。ただ現在は、大規模校2校のほかに、さまざま配慮が必要な子を含めた1校を設けるなど、「試してみる」ということもあって良いのでは。（委員）

- ・ 多くの意見をお聞きし、将来的には1校、途中の段階で3校が良いのではないかと。ただ、「地域との関わり」という点では、小規模校の良さというものは確かにあった。これから統合が進むと休校、閉校になる学校が増えることから、そういった学校の校舎を「地域との関わり」の観点からどう利用していくかが課題と思う。
- ・ 市内の幼稚園児は、例えば赤湯幼稚園だからと言って赤湯の子ばかりではない状況である。旧町村の枠組み（赤湯、宮内、沖郷）にこだわる必要はもはや無いのではないかと。
- ・ 小学校で、いわゆる旧町村の枠組みにこだわって「3校」への統合を考えると、学校によっては学級数の関係でまたすぐ再検討が必要になってしまう。ある程度「規模の確保」を踏まえて「南陽は一つ」という観点で検討をした方が良いと思う。

#### 【まとめ】

- ・ 今回は、「小学校の適正規模」に絞って議論を行った。
- ・ 各委員から多様な意見が出されたが、子どもたちにとってよりよい教育環境を整えるためには、中学校と同様、学校を一定規模以上の集団規模、具体的には「12学級から18学級」を確保することが必要であるとの認識は共通した。  
その際、当面「3校」あるいは「2校」が望ましいとする意見が多くを占めた。また、現在の児童数の急激な減少を鑑みれば、いずれは中学校と同様、「1校」への道筋もつけておかなければならないとの意見も多かった。
- ・ なお、統合のあり方として、「沖郷・赤湯・宮内」の現在の中学校区1校ずつということが想定されるが、12学級から18学級の学校規模を確保するため、児童数のバランスを考慮し、現在の中学校区の枠組みを超えた検討の必要性も明らかになった。「南陽市という一つの地域」という考え方のもと、将来を見据えて「南陽市内に3つの小学校をつくる」という考え方が大切で、委員会としての「3校案」の一つとしてあげられた。
- ・ その他  
「現在ある小規模校については出来るだけその良さを大事にしていきたい。」「小規模校の統合にあたっては、その校の保護者の意見を参考にしてほしい。」「統合にあたっては、校舎の建て替えや地元での再利用の可能性等も考慮して進めるべき。」「小学校の校舎の中に地域の人が活動をするスペースがある等、新しい仕組みもあって良いのではないかと」といった意見が出された。
- ・ 次回、第5回目の検討委員会では、これまで出された意見文言を整理し、教育委員会への答申（案）の検討を行っていくことを確認。

○その他 次回委員会：10月24日（木）開催予定

（閉会）